

保育士養成課程における実習指導上の留意点：施設実習の事前指導における教育内容の検討

著者	清水 里美, 吉島 紀江, 志澤 康弘, 藤本 史
著者所属(日)	平安女学院大学短期大学部保育科 平安女学院大学短期大学部保育科 平安女学院大学子ども学部 平安女学院大学学生相談室
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	13
ページ	19-28
発行年	2013-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001303/

保育士養成課程における実習指導上の留意点^{注1)}

— 施設実習の事前指導における教育内容の検討 —

清水 里美・吉島 紀江・志澤 康弘・藤本 史

要 旨

本研究は、保育士養成課程における施設実習指導の留意点を明らかにすることを目的として、施設実習に関する学生の不安要因を探るとともに、ストレスの自覚とストレスコーピング方略との関連を検討した。不安要因としては、宿泊に伴う環境の変化や実習先での人間関係、実習日誌に関する困惑が多かった。また、ストレスが高い学生は、「抑圧」や「発散」といった望ましくないストレスコーピング方略を用いていることが明らかとなった。したがって、学生が自身の不安やストレスに気づき、より望ましい対処法を身につけるよう具体的に指導していくことの重要性が示唆された。

〔キーワード〕 施設実習 不安要因 ストレスコーピング

はじめに

近年、家庭や地域の養育能力の低下が深刻な問題として取りあげられている。児童虐待件数の増加¹⁾にみられるように子育て環境が厳しくなっていること、また就学前の子どもたちのほぼ100%近くが幼稚園や保育所を利用するようになってきている²⁾³⁾ことなどから、幼稚園・保育所に関わる施策だけでなく、保育士養成課程における教育内容の見直しがおこなわれている。それを受けて、2009年4月1日より新『幼稚園教育要領』・新『保育所保育指針』が施行された。2012年に可決された改定認定こども園法(子ども・子育て関連3法)⁴⁾も、就学前の子どもの教育および保育内容の統一を目指したものであるといえよう。

このような社会状況を背景に、保育士養成校では、保育者を目指す学生に対し、様々な保育現場の実態が理解できる内容を教育課程に盛り込み、実践的な力を育成することが求められている。2011年度入学生からは、保育実習が実習と実習指導に分けられ、それぞれに単位が与えられるように改定された。たとえば、必修である保育実習は、『児童福祉法施行規則第6条の2第1項第3号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法』に基づくと、保育実習Ⅰの実習4単位と保育実習指導Ⅰの演習2単位で、実習日数は概ね20日とされている⁵⁾。保育実習の中に含まれていた実習指導に単位が与えられるように改定されたことで、よりいっそう実習の指導内容に重きがおかれ、効果的な教育の工夫に焦点が当てられるようになるであろう。

保育士資格を取得するには、保育と養護に関する専門科目のほか、心理学や小児保健、小児栄養、家庭支援など幅広い知識を身につけることが求められている(平成22年厚生労働省告示第278号)。また、必修とされる保育実習のなかでも、とりわけ施設実習においては泊まり込みで入所者と生活を共にする実習形態が一般的であるため、生活全般にわたる幅広い教養と洞察力が必要であろう。保育職を目指す学生にとって、施設実習は施設保育士の仕事に触れ、将来のキャリア目標を抱く契機となる。しかしながら、さまざまな知識や技能が求められることに加え、宿泊を伴うという施設実習の条件は、学生のストレスを高めることにつながりやすい。実際に、これまでの研究から、児童福祉施設での実習中は、通常の授業よりもストレス反応が高い水準になること⁶⁾が示されている。さらに、実

習の評価が保育者としての効力感に関係する⁷⁾という指摘があり、施設実習を学生がどのように体験するかがその後の保育者としての学びのあり方に大きく影響すると考えられよう。

一方、心理教育の分野では、自己のストレスコーピング方略（ストレスへの対処の仕方）を知り、より適切な方略を身につけるよう指導するストレスマネジメントが、学校現場を中心として広く採用されており、メンタルヘルス向上にとって効果が大きいとされている（武田ら 2004⁸⁾；松木 2004⁹⁾）。したがって、施設実習の前にストレスマネジメント教育を行うことは、学生の実習への適応を促すうえで有効であると考えられる。しかしながら、現状では実習事前指導プログラムにストレスマネジメント教育は含まれていない。そのため、実習前にストレスの自覚が高い学生は、個別に学生相談室を利用していることが少なくない。

I 目的

本研究では、まず施設実習における学生の不安要因について調べ、終了後の振り返りをもとに実習事前指導における教育内容について検討する。次に、それぞれの学生のストレスの自覚とストレスコーピング方略との関連を調べ、ストレスマネジメント教育の視点からの分析を試みる。ストレスコーピングは、Lazarus ら（1984）¹⁰⁾により「脅威をもたらす事態に対する認知的および行動的な努力」と定義されており、どのようなコーピングを行うかによって、ストレス反応が異なってくるとされている（永浦ら、2009）¹¹⁾。また、コーピングは状況依存的であり、同じ個人でも場合によって用いるコーピングは異なっていることが指摘されている（Lazarus ら、1984）¹⁰⁾。これまで、保育実習、教育実習、看護実習といったさまざまな実習に関わるストレス要因の分析や学生が感じるストレスと実習でのサポートとの関連についての分析（音山 2002¹²⁾；林 2012¹³⁾など）、あるいはストレスとコーピングおよび性格との関連についての研究（近村ら、2007）¹⁴⁾など、ストレスやストレスコーピングと実習との関連については幅広く検証されているが、実習事前指導とストレスマネジメント（ストレスを適切に扱う）教育との関連についてはほとんど取り上げられていない。ここでは、ストレスマネジメント教育の視点からストレスコーピング尺度として開発されたチェックリストを用い、実習に関わってストレスの自覚とストレスコーピングがどのように変化するかを分析し、実習指導におけるストレスマネジメント教育の有効性について検討する。また、学生の不安やストレスに対する学生相談室との有機的な連携のあり方についても考察する。

II 方法

1. 調査対象

「保育実習 I」及び「保育実習指導 I」を履修している女子短期大学部保育科 1 年生（18 歳から 19 歳）69 名を対象とした。対象者を実習施設種別にみると、児童養護施設 43 人、乳児院 8 人、知的障害者施設 18 人であり、全体の 6 割が児童養護施設、1 割が乳児院、2 割強が知的障害児者施設で実習をおこなった。実習施設の種別については、事前に学生に対して希望調査をおこない、第 1 希望もしくは第 2 希望の施設になるよう配慮した（図 1）。

2. 調査項目と調査手続き

「施設実習の不安要因に関する調査」と「ストレスとストレスコーピングとの関連についての調査」は個別におこなった。

(1) 施設実習の不安要因に関する調査

不安要因の調査は 2 回おこなった。第 1 回目の調査は施設実習のおよそ 3 カ月前に事前調査としておこない、第 2 回目の調査は施設実習の終了直後におこなった。

①調査項目

第1回目の調査における質問項目は、a. 施設実習についての期待、b. 施設実習についての不安、c. 実習対象施設でのボランティア経験の有無、d. 具体的なボランティア内容と期間、e. 施設実習に期待している具体的な内容、f. 施設実習で不安に思っていること、g. 事前の実習指導で学習しておきたいこと、の7項目であった。調査項目aの「実習に対する期待」と質問項目bの「実習に対する不安」については、「とても期待している／とても不安である」「少し期待している／少し不安である」「どちらともいえない」「そうは期待していない／そうは不安ではない」の4件法とし、その他のc～gの項目は自由記述とした。第2回目の調査における質問項目は、a. 実習施設の概略、b. 実習施設で大切にしていたこと、c. 実習施設での利用者の生活の改善点、d. 実習中の印象に残っている出来事、e. 実習中にとくに気をつけて実践したこと、心掛けたこと、f. 実習施設での保育士の役割、g. 事前指導で学習して役立った内容、h. 実習中に困った出来事、の8項目であった。いずれの項目に対しても自由記述での回答とした。

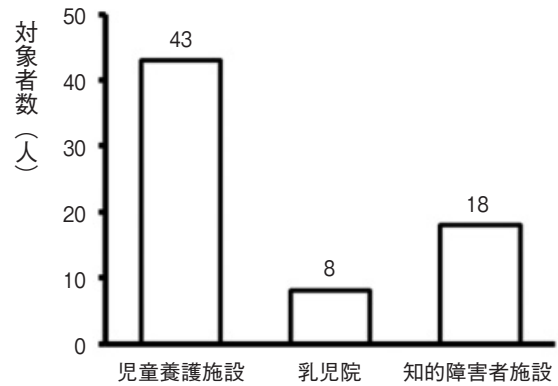


図1 実習施設種別対象者人数 (人)

②調査手続き

第1回目の調査は、2011年11月10日に「実習指導I (施設実習)」初回の授業でおこなった。授業の開始時に、質問紙を配布し、その場で回答を求め、回収した。第2回目の調査は、2012年3月19日に「保育実習I (施設実習)」の最終の授業(調査対象者全員が施設実習を終えた直後)でおこなった。授業の開始時に質問紙を配布し、その場で回答を求め、回収した。回収した質問紙の自由記述の回答内容は、Flick (1994)¹⁵⁾のテーマ的コード化の手法を参考に分析をおこなった。

(2) ストレスの自覚とストレスコーピングとの関連についての調査

ストレスの自覚とストレスコーピングに関する調査は、計3回おこなった。第1回目と第3回目については、学生相談室が中心となって実施している結果を活用した(学業への適応や進路選択など心理的な問題に対する予防的な取り組みをおこなうことは学生の大学生活を支えるうえで有意義であるとの認識から、本学では学生相談室が主体となって、毎年、年度初めにストレスチェックを全学的に実施している)。第2回目については、不安要因に関する調査と合わせて実施した。

①調査項目

ストレスの自覚については、松木ら(2004⁹⁾)をもとに作成した「健康アンケート^{注2)}」を用いた。また、ストレスへの対処方略を調べる項目は、「ストレス・コーピング・スケール^{注3)}」(富永、2000¹⁶⁾)を参考に前述の松木が一部改変したもの)を用いた。

「健康アンケート」は、自覚できるストレスに関する20項目の質問から構成されており、簡便なため学校現場などで広く採用されているものである。質問紙には「……以下のアンケートで自分のストレス度をチェックしてみてください」という教示がついており、学生は自分のペースで回答できる。項目の例としては「朝起きにくくボーとしている」「無性に腹が立ってきて他人を傷つけたくなくなる」「体や性格のことで悩んでいる」「何をしても面倒くさいと思う」「授業に集中できない」などであり、心や身体のスレス反応を問うている。質問に対し、「よくある」(2点)、「ときどき」(1点)、「ない」(0点)の3件法で答え、結果は0-40点(ストレス得点とする)で、得点の高い方がストレスを強く感じていることになる。

「ストレス・コーピング・スケール」は、質問紙に「『いやなことがあったり、プレッシャーを感

じる時』、あなたはどのようにしていますか？質問を読んで、自分に一番近いと思う数字に○をつけてください。」という教示がついており、「相談」「焦点対処」「リラックス」「抑圧」「発散」の5つのストレスコーピング方略それぞれについて4項目ずつ使用頻度を問うものである。「まったくしていない」(0点)から「すごくしている」(5点)までの6件法で答え、各方略について20点満点となっている。項目の例と富永ら(2009)¹⁷⁾による内容の解説をあげると、「相談」は「友人に話す」「誰かにグチを聞いてもらう」など他者に対して自らの経験を語ることを通して自己のコントロール感を取り戻そうする内容、「焦点対処」は「これからどうするか考える」「つらいことが解決するようにいろいろやってみる」など問題解決のために現在の状況を確認、それに対処しようという内容、「リラックス」は「プラスのメッセージを自分に送る」「肩や指などの力を抜きリラックスする」などリラクゼーションや認知的ストレスマネジメント方略を反映させた内容、「抑圧」は「自分の気持ちをおもてに出さないようにする」「つらいことは自分の心の中にしまい込む」などつらいことそのものを心の中に抑えてしまおうという内容、「発散」は「こわしてはいけないものをこわす」「やつあたりをする」など気晴らしや行動的回避の内容となっている。それぞれ得点が高いほど、そのストレスコーピング方略をよく用いていることになる。したがって、「抑圧」と「発散」については、得点が低い方(用いない方)が望ましいといえる。これらは、いずれも学生が簡単に自己診断できるようになっている。

②調査手続き

実施時期は、第1回目は大学入学後すぐの健康診断時、第2回目は施設実習事前指導中、第3回目は次年度の健康診断時、の計3回であった。第1回目と第3回目については、先に述べたように、学生相談室が中心となって実施したものを活用した。第2回目については、施設実習指導の授業の初回に施設実習に関する不安要因の調査と同時に実施することで、実習を意識させた。

3. 倫理的配慮

授業時間内に実施した調査では、質問紙配布前に全員を対象に口頭と書面で本研究の主旨を説明した。また、回答したくない項目については回答しなくてもよいことを伝えた。さらに、個人は特定されないため回答者に不利益が生じないこと、成績には一切関係しないこと、研究の目的以外には決して使用しないことを説明し、同意を得られたもののみ回収した。また、健康診断時のストレスの自覚とストレスコーピングに関する調査については、まったく任意のものであり、提出も学生に任されている。本研究への使用についての同意は、不安要因の調査時に得ている。

Ⅲ 結果

1. 施設実習の不安要因に関する調査

質問紙調査第1回目の回収率は96%(66名)、第2回目の回収率は100%(69名)であった。

(1) 施設実習についての期待

「とても期待している」11%、「少し期待している」29%、「どちらともいえない」55%、「そうは期待していない」5%であり、4割の学生が実習に対して期待感をもって臨もうとしていた(図2)。また、半数の学生は実習に対して何とも言えな

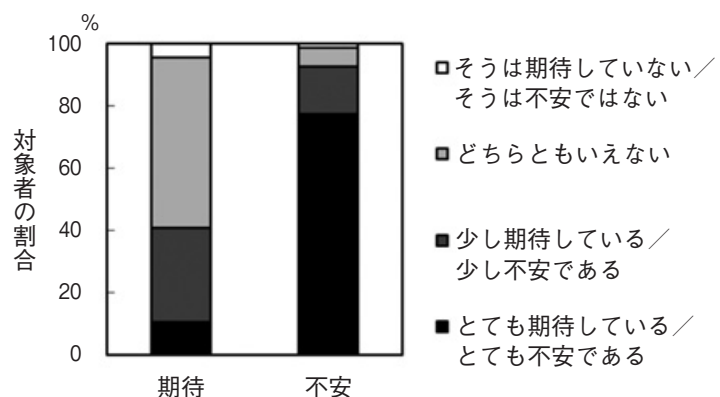


図2 施設実習に対する期待と不安

い複雑な思いを抱いていた。期待している内容について具体的に挙げると、「未知である施設について実際を知ることができること」、および「子どもたちや利用者と実際に関わり、良い関係が築けること」などであった。

(2) 施設実習についての不安

「とても不安である」77%、「少し不安である」15%、「どちらともいえない」6%、「そうは不安ではない」2%と、9割を超える学生が施設実習について不安を抱いていた(図2)。具体的な不安要因については宿泊に伴う内容が多く、「寝ることができるか」など自宅を離れての生活の不安があった(表1)。また、「一緒に行く学生とうまく実習期間を過ごすことができるか」といった人間関係に関する不安もみられた。さらに、「実習課題である日誌についての不安」、および「子どもたちや利用者との関わりがうまくできるか」といった不安もみられた。これらは、林(2012)¹³⁾の研究における、「保育技術の不足」「保育者とのかかわり」「多忙感と身体疲労」といった要素と一致する。また、実習に初めて参加した場合の不安要因は、保護者との人間関係よりも、学生としての普段の生活と異なる生活パターンや立場、およびそれらに付随する責任、保育技術そのものの不足であるとされている(林、2012)¹³⁾が、本研究においても同様の結果が得られたといえよう。

(3) 事前指導で学習したい内容

事前指導で学習しておきたい内容として挙げられたのは、「施設の概況について」と「入所者や職員との具体的な関わり方」であった(表2)。

表1 不安内容
(事前アンケート)

サブカテゴリー	コード/アンケートの引用
実習内容	期待される動きができるか。日誌がうまく書けるか。緊急時の対応。実習内容。失敗しないか。
コミュニケーション	なじめるか。暴言を受けないか。コミュニケーションの方法。怒り方。傷つけないか。拒否されないか。
宿泊	夜、寝られるか。一緒に行く学生と仲良くできるか。家に帰れない。一人になれない。アレルギーが出ないか。持ち物。体調を崩さないか。食事に好き嫌いがある。携帯電話が使えるか。実習費。休みの日の過ごし方。朝、起床できるか。

表2 実習指導で学習しておきたい内容
(事前アンケート)

サブカテゴリー	コード/アンケートの引用
施設の概要	施設の生活。施設の活動内容。仕事の内容。一日の流れ。施設の特徴。
コミュニケーション	子どもとの関わり方。職員の方との関わり方。注意事項。障害別の関わり方。

(4) 事前指導で学習して役立った内容

事前準備をしておいて役に立ったこととして、「施設見学をしたこと」や「施設の概要についての学習」、「先輩の体験を聞いたこと」が挙げられた。また、「日誌の書き方」や「家事の宿題を課していたこと」も有効であった。さらに、「関連科目の教科書を読んでおいた」という記述もみられた(表3)。

(5) 実習中の印象に残っている出来事

知的障害児者施設で実習した学生は、具体的な介助の実践をし、苦戦したことや成功したことを印象に残った出来事として挙げていた。一方、児童養護施設で実習した学生は、子どもとのかかわりを通して、信頼関係を結んでいく過程やコミュニケーションの成功体験を挙げていた。また、乳児院で実習した学生は、知的障害児者施設で実習した学生と同様に、沐浴・授乳・オムツ交換を行った経験を挙げていた。

表3 事前準備をしておいて役立ったこと
(事後アンケート)

サブカテゴリー	コード/アンケートの引用
施設	利用している子どもについて。役割。見学。先輩の話。オリエンテーション。施設の発刊物。パンフレット。ホームページ。
実習内容	絵本。流行を知る。家事。障害について。おむつ交換の方法。教科書を読む。発作の種類。手遊び。歌。車椅子の操作方法。手引き歩行の方法。ボランティア。調理。日誌を書いておく。

表4 実習中に困ったこと
(事後アンケート)

サブカテゴリー	コード/アンケートの引用
コミュニケーション	きつい言葉。無視。声かけの方法。拒否されたときの対応。職員さんとの関わり。言葉遣い。中高生の対応。怒り方。男の子との関わり。冷たくされたとき。適度なスキンシップの方法。
宿泊	宿泊の設備。洗濯物が乾かない。寒かった。二層式の洗濯機の使い方。目覚まし時計を忘れた。暖房がきかなかった。洗濯石鹸を忘れた。部屋の温度調整ができなかった。眠れなかった。
実習内容	裁縫。歯磨き介助。料理。感染症への対応。日誌。学習会のレポート。設定保育。制作。おむつ交換の方法。栄養学について。知的障害についての知識。

(6) 実習中に困った出来事

実習中の困った出来事について、最も多かったのは「子どもや利用者との関わり」であった。「否定される」「無視される」「言語的な関わりができない」といったことが最も困ったこととして挙げられていた。その次に多かったのは、自宅を離れての実習であることに関連した困りごとであった(表4)。

2. ストレスの自覚とストレスコーピングとの関連についての調査

3回の結果がそろった63名の学生を分析の対象とした。3回の「健康アンケート」の結果、全体的としては、ストレスは実習前に上がり(図3、対応のあるt検定、 $t_{(62)} = 9.23, p < .05$ 、多重比較にボンフェローニの補正、以下同様)、実習後に下がった($t_{(62)} = 4.67, p < .05$)が、少数ながらストレス得点が常に低い、あるいは常に高い学生がおり、個人の学生生活への適応の問題が背景にあるのではないかと考えられる。

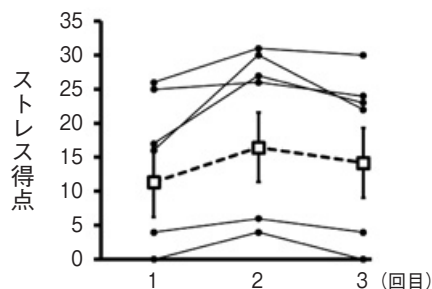


図3 ストレス得点の変化
白抜き四角のマーカは各回の平均値、エラーバーは1標準偏差を示す。直線で結ばれた黒丸はいずれの回かでストレスが平均±2標準偏差を超えていた回答者。

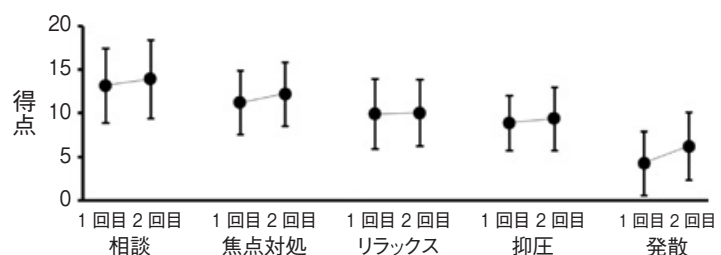


図4 ストレスコーピング方略ごとの1回目と2回目の得点の比較 (エラーバーは1標準偏差)

また、本研究で調べたストレスコーピング方略は、ストレスをもたらすような環境での出来事との遭遇が展開していくにつれて、さまざまに変化していくコーピングを対象にしている(富永ら、

2009)¹⁷⁾。そのため1回目と2回目でストレスコーピング方略がどのように変化したかを調べたところ、「相談」と「発散」が有意に増えており(図4、相談： $t_{(62)} = 2.09$ 、 $p < .05$ 、発散： $t_{(62)} = 4.08$ 、 $p < .01$)、「焦点対処」は増加していたものの統計的に有意ではなかった($t_{(62)} = 1.94$ 、 $p < .10$)。

さらに、ストレスの自覚の変化とストレスコーピング方略との関連をみるために、それぞれの時期ごとにストレスの自覚とストレスコーピングとの関連を調べた(表5)。1回目、2回目とも、

ストレスが高い学生は、ストレスコーピング方略の「抑圧」と「発散」が高いことが示された(1回目：抑圧； $r = .45$ 、発散； $r = .30$ 、2回目：抑圧； $r = .25$ 、発散； $r = .41$ 、いずれも $p_s < .05$)。

すなわち、ストレスの自覚が強い学生は、コーピング方略として感情を抑圧したり、やつあたりなどにより発散したりすることが多いことが示された。

表5 ストレスおよびストレスの変化と
ストレスコーピングとの相関係数($n=63$)

* $p < .05$ 、** $p < .01$

ストレス コーピング 下位項目	ストレス× ストレスコーピング	
	1回目	2回目
相談	-.060	.010
焦点対処	-.102	.071
リラクセス	-.183	.125
抑圧	.447**	.252*
発散	.299*	.414*

IV 考察

1. 施設実習の不安要因に関して

事前・事後の質問紙調査の結果、大きく2つの不安要因がみられた。いずれも事前調査で不安なこととして挙げられており、かつ事後調査でも実際に困ったこととして挙がっていた。1つは、宿泊に伴う不安であり、もう1つは、否定的な関わりに対する不安である。これらは、個人差はあるものの、総じて環境変化に対する見通しが弱く、事前に準備として何が必要かを具体的にイメージすることが難しかったためであると考えられる。また、否定されたときの対応については、さまざまな対処の方法を事前に身につけておくことが、不安を軽減させることにつながるのではないかと考えられた。

今回の調査により、環境変化に対して必要な準備を具体的にイメージできるよう、事前に自宅を離れた生活体験などの機会を提供していく必要性が示唆された。また、子どもや利用者への関わりについては、望ましい対応の仕方は学習しているが、否定された場合にどう対処すべきかといった指導はおこなわれていなかった。したがって、実習先でのさまざまな事態に柔軟に対処できるよう、場面設定したロールプレイを取り入れるなど教授内容の工夫が必要であるといえよう。

2. ストレスの自覚とストレスコーピングとの関連について

ストレスマネジメント教育の一般的なプログラムでは、ストレスの概念を理解し、自分のストレス反応に気づくこと、およびストレスの対処法を習得し、活用することが目標となる。本研究で、ストレスの自覚の高い学生がどのようなコーピング方略を用いているかを分析したところ、「抑圧」や「発散」といった方略を用いている学生ほどストレスを感じやすいことがわかった。すなわち、「発散」「抑圧」といった情動に焦点をあてたコーピングを用いている学生の方がストレスは高く、「抑圧」や「発散」は効果的なストレスコーピング方略でないと考えられる。

また、第1回目と第2回目で学生が用いるストレスコーピング方略に変化がみられた。「相談」が増えている一方で、望ましくない方略である「発散」も増えている。「相談」が増えていることについては、入学後半年が過ぎ、学内で人間関係ができたことや施設実習という共通課題があるので友人と不安を共有でき、共感を得ることが比較的容易となっていることによるのかもしれない。一方、「発散」が増えていることについては、宿泊を伴う施設実習が免許取得のために避けては通れない課題であることから、閉塞状況に陥っているとの追いつめられた気持ちになった学生が存在したためとも考

えられる。こうしたことをふまえ、ストレスの自覚がある学生に対し、何がストレスであるのかを言語化するよう促し、自身の普段のストレスコーピング方略を見直し、より望ましい対処法を身につけるよう指導することが必要であると考えられる。先に、不安要因の分析から、事前指導の中で、具体的な対処法を教えていくことが望ましいと考えられたが、とくにロールプレイは言語化を促し、具体的な対処法を身につけることができるため、閉塞状況を打破するきっかけとなると考えられる。

また、学生相談室の立場からは、健康診断の際にストレス得点の高い学生に対し、フィードバックをおこなうよう努めているが、その時点で継続的な相談に結びつくことはまれである。ところが、実習前になると、プレッシャーや不安を抱えきれずに学生相談室を訪れる学生が現れ、面接の中で実習にまつわるストレスのみならず、自身が抱える悩みや課題、就職に向けての不安などが語られる。すなわち、実習が自己と向き合う一つの契機となっているように感じられる。その際に、ストレスの自覚やストレスコーピング方略について一緒に見直すことで、学生自身が自己の問題についての理解を深め、前向きに適切な対処方略を獲得する姿勢につながると考えられる。

まとめ

本研究では、まず、施設実習に対する学生の不安感を減らすために、事前指導で学生にどのようなことを教えるべきかについて、具体的な内容の検討をおこなった。次に、実習の不安感に対する心理的なサポートとして、ストレスの自覚とコーピングスタイルの視点から検討を加えた。

実際の施設保育士の職務内容を考えると、さまざまな事態を想定でき、それに臨機応変に対処できる力が求められる。また、当然コミュニケーション能力も必要である。実習事前指導では、学生が知識を受け身で学ぶのではなく、自らの力量に気づくこと、対処能力を身につけること、などが求められる。本研究における不安要因に関する調査から、具体的な経験を積んだり、自己理解を深めたりできる機会を提供することが必要であるとの示唆が得られた。また、ストレスの自覚とストレスコーピングとの関連の分析からは、チェックリストを用いて自己理解を促した結果を踏まえて、学生の希望に応じ、個別の場で気持ちや考えを言語化する、あるいは適切な対処方略を身につけるような指導をおこなうことが望ましいと考えられた。

今後ストレスマネジメント教育に関して、学生の個別のニーズに対応するだけでなく、事前指導の授業の中でストレスについての理解を深め、教育やリラクゼーションなどの対処法を教える機会を設け、その有効性について検討することが必要であろう。

注

- 1) 本研究は、全国保育士養成協議会 第51回研究大会（2012）で発表したものを加筆修正した。
- 2) 松木 繁・宮脇宏司・高田みぎわ編著（2004）、『教師とスクールカウンセラーでつくるストレスマネジメント教育』、あいり出版、p.96。
- 3) 前掲書、p.43。

引用文献

- 1) 厚生労働省ホームページ「子ども虐待による死亡事例等の検証結果（第8次報告の概要）及び児童虐待相談対応件数等」<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200002fxos.html>.2012.8.31
- 2) 厚生労働省ホームページ「平成22年社会福祉施設等調査結果の概況」<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/10/index.html>.2012.8.31
- 3) 文部科学省ホームページ「学校基本調査平成22年（確定値）結果の概要」

- http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1300352.htm.2012.8.31
- 4) 文部科学省ホームページ「第180回国会における文部科学省提出法律案」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/1318796.htm.2012.8.31
 - 5) 平成22年厚生労働省告示第278号「児童福祉法施行規則第6条の2第1項第3号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法」
 - 6) 音山若穂・今泉礼右(2001),「児童福祉施設実習生の心理的ストレス反応の変化と自己評価、刺激自体の検討」、『保育士養成研究』, 19, pp.15-27.
 - 7) 三木知子・桜井茂男(1998),「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」,『教育心理学研究』, 46, pp.203-211.
 - 8) 武田 一・内田和寿(2004),「大学生・短期大学部生に対するストレスマネジメント教育効果に関する研究」,『ヘルスカウンセリング学会年報』, 第10号, pp.41-48.
 - 9) 松木 繁・宮脇宏司・高田みぎわ編著(2004),『教師とスクールカウンセラーでつくるストレスマネジメント教育』, あいり出版, pp.20-21.
 - 10) Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984), *Stress, appraisal and coping*, New York: Springer. (1991, 本宮 寛・春樹 豊・織田正美監訳『ストレスの心理学 — 認知的評価と対処の研究 —』, 実務教育出版)
 - 11) 永浦 拓・富永典子・富永良喜(2009),「ストレスマネジメント法で活用するためのストレスコーピング尺度作成の試み」,『発達心理臨床研究』, 第15巻, pp.85-90.
 - 12) 音山若穂(2002),「児童福祉施設実習生の実習ストレスと緩衝要因およびストレス・プロセスと自己評価の関連」,『保育士養成研究』, 第20号, pp.9-23.
 - 13) 林富公子(2012),「初めての保育所実習におけるストレスについての考察」,『園田学園女子大学論文集』, 第46号.
 - 14) 近村千穂・小林敏生・石崎文子・青井聡美・飯田忠行・山岸まなほ・片岡 健(2007),「看護臨床実習におけるストレスとストレスコーピングおよび性格との関連」,『広島大学保健学ジャーナル』, Vol.7 (1), pp.15-22.
 - 15) ウヴェ・フリック著・小田博志翻訳(2002),『質的研究入門(人間の科学)のための方法論』, 春秋社, pp.219-244.
 - 16) 富永典子(2000),「子どものストレス対処チェックリスト」,『兵庫教育大学修士論文』.
 - 17) 富永典子・富永良喜(2009),「ストレスマネジメント教育で活用できる子どものストレスコーピング尺度の作成」,『発達心理臨床研究』, 第15巻, pp.75-83.

参考文献

- Folkman, S., Lazarus, R. S., Dunkel-Schetter, C., DeLongis, A., & Gruen, R. J. (1986) "Dynamics of a stressful encounter: Cognitive appraisal, coping, and encounter outcomes", *Journal of Personality and Social Psychology*, 50: pp.992-1003.
- Folkman, S., Lazarus, R. S., Gruen, J., & DeLongis, A. (1986) "Appraisal, coping, health status, and psychological symptoms", *Journal of Personality and Social Psychology*, 50: pp.571-579.
- 斉藤瑞希・菅原正和(2007),「ストレスとストレスコーピングの実効性と志向性(I) — ストレスとコーピングの理論 —」,『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 第6号, pp.231-243.

Several Issues on the Instruction of Practical Training for the Course of Teachers of Nursery School

SHIMIZU, Satomi・YOSHIJIMA, Norie
SHIZAWA, Yasuhiro・FUJIMOTO, Fumi

In this study, we conducted a survey of students' anxiety about the facilities training and stress coping strategies to examine several issues on the points that we need to be careful in instructing them before the practical training at social welfare facilities. The results showed the anxiety factors of the students in their daily life (for the ten days of their practical training), while making good relationships with the staff and users at the facilities, and submitting reports on their experiences. The survey also indicated that those who felt high stress before the practical training coped with their stress in inappropriate ways. As to the instructions of practical training, it will be necessary to focus on students' anxiety factors and give them concrete advice so that they can take steps to cope with their anxiety and stress about the facilities training in more appropriate ways.

Key Words : Practical Training, Anxiety, Stress Coping